

2026

多摩境駅待合室の改善

Improvement of Tamasakai station's waiting room

AD 29 長山 達也
指導教員 比留間 真

1.研究目的

駅のホームに設置されている待合室は簡易的なものが多く、利用者へのサービスとして必ずしも十分と言えない。一方近年、公共空間の安全性への関心が高まっており、その点について見直す必要があると考えられる。

そこで私は最も身近である多摩境駅の待合室を対象に、快適性と安全性という観点から現在求められている待合室のあり方を提案したい。

2.調査と分析

多摩境駅は丘陵地の一部を削りぬいた形で建てられており、その構造により陽光が差し込みづらく、視界が閉ざされ見通しが悪い環境にある。待合室はその中でも最も暗い階段下の目の届きづらい場所に位置している。そのため清潔感や安心感が弱く感じられる。また、エレベーター脇に設置されているにもかかわらず通路が狭く、車椅子やベビーカーが通行するには寸法上問題がある。また、内装は各パーツをそのまま取り付けただけであり、待合室にふさわしい印象とはいえない。

利用者は新興住宅地であることと周囲の店舗などから小さな子供連れの親が多く、今後も増加していくと考えられる。

3.コンセプトの立案

「安全で快適な安らぎ空間」

- ・複数の方向から視線が通る
- ・目的にあった空間を選ぶことで快適に過ごせる

4.デザイン展開

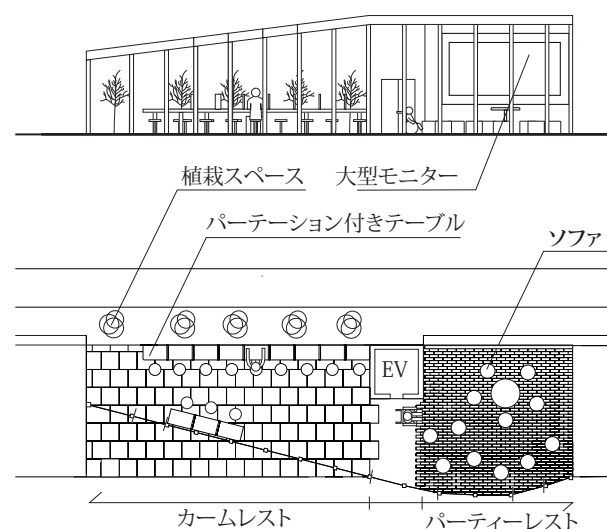
待合室の設置場所はエレベーターとの位置関係から現状のままとし、車椅子やベビーカーでも余裕を持って通れる広さを確保することを基本とし、優先されるべき利用者への配慮を第一とした。室内をエレベーターを挟んで二つに分け、個人のための「カームレスト」とグループのための「パーティーレスト」に用途を振り分けた。

「カームレスト」は個人のスペースをパーティションで確保しつつ開放的な空間を提供するため、駅舎の壁と擁壁の隙間を植栽スペースとして活用した。

「パーティーレスト」は人とのつながりを大事にしてもらいたかったため、ソファは固定せず、自由に動かせる自由度を持たせた。また壁面に大型のモニターを設置し京王電鉄の情報を流し、駅と利用者間のつながりにも配慮した。

安全性に関しては階段やエレベーターホールの一部から待合室の様子が見えることやホームへと大きく張り出した形状などにより、周囲からの視認性の向上を狙い、存在感をアピールすることで防犯性を高めた。

5.完成図



6.結論

公共空間を対象に研究を行い多摩境駅の待合室の問題の改善に努め、周囲の環境や待合室の使い方は考えられたが、細かな内装までは手が行き届かなかった。また今後は各パーツのユニット化など生産性についても考慮しなければならないと思う。

7.参考文献

京王グループ、2007、「一日の乗降者人員」(<http://www.keio.co.jp/traffic/train/joukou/index.html>, 2006.10、1)

日本建築学会、1996、『コンパクト建築設計資料集 成』丸善株式会社